

<研究成果の紹介>

水稻新品種「みえのえみ」の栽培法

作物グループ

1. 成果の内容

本県で育成された水稻新品種「みえのえみ」は、「コシヒカリ」より収穫時期が5日程度早い良品質・良食味品種で、一時期に集中化する本県稲作の収穫時期分散効果と、早場米として販売面の有利性が期待されています。平成11年度から本格的な栽培が始まりましたが、今年の作付けはすでに約500haあり、今後さらに栽培面積が増加すると予想されます。今回、より良食味で品質の高い「みえのえみ」を生産するための栽培方法を開発しました。

1) 基肥施用量

「みえのえみ」は短稈品種で、基肥窒素を9kg/10a施用しても倒伏は発生しませんでした。しかし、基肥窒素量を増加すると、生育量が増大することから籾数が増加し、これにともなって食味にマイナスの影響を与えるタンパク含量が増加しました(図1)。このことから、みえのえみの基肥窒素量は、穂肥施用前の生育量(草丈×m<sup>2</sup>茎数値)が3.2万~3.5万となる量が適当で、おおよそ草丈50~53cm、茎数630~680本/m<sup>2</sup>、葉色値31~33SPADが適正生育量の目安です。場内では基肥窒素量が側条施肥で4~4.5kg/10a、全層施肥で5kg/10a程度が適当でした。

2) 穂肥施用時期と施用量

穂肥は収量をも高める効果が高いものの、施用量が多くなると玄米中のタンパクが増加し食味が低下します。収量と玄米タンパク含量のバランスから、「みえのえみ」の穂肥は、出穂20日前頃に窒素3kg/10a、または出穂20日前と10日前に窒素2kg/10aずつの施用が良好な結果となりました。また、生育量が不足する場合は、穂肥施用時期を5日程度は早めることで、タンパクを増加させずに収量の低下を抑制

することができます(図2)。

3) 栽植密度

60~80株/坪の範囲で、栽植密度が収量・品質に与える影響は比較的小さく、慣行的な70株/坪程度が良いと考えられます(図表略)。

4) 移植時期

「みえのえみ」は「コシヒカリ」に比べ、移植時期を遅らせても移植期から出穂期までの期間が短縮されにくい傾向があります。このため、収穫期の分散対策として「コシヒカリ」より5日程度成熟期を早めるためには、みえのえみを4月下旬までに移植する必要があります(図表略)。

2. 技術の適用効果と適用範囲

より高品質で食味の良い「みえのえみ」の栽培が普及することで、「みえのえみ」のブランド化が図れます。

3. 普及・利用上の留意点

試験は、やや地力の高い農業技術センター内水田で行った結果です。施肥量は土壌、前作条件により多少の加減が必要となります。

(神田幸英)

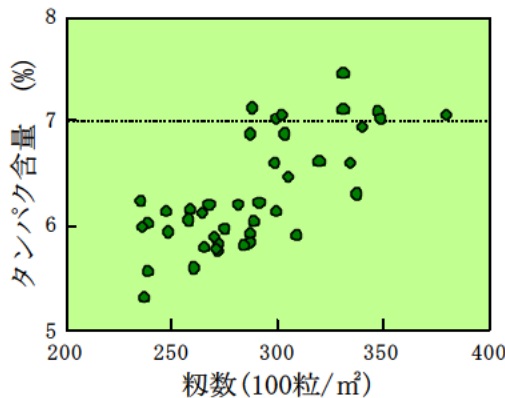


図1 「みえのえみ」の籾数とタンパクの関係 (H10, 11)

注) タンパク含量は玄米水分15%換算値。

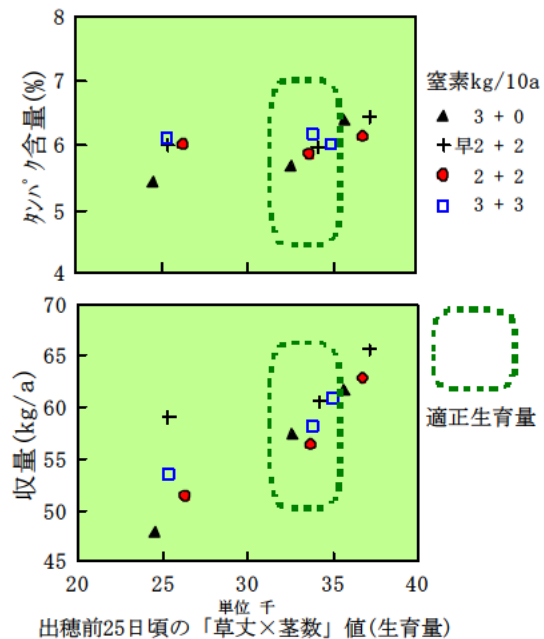


図2 「みえのえみ」の穂肥施用方法が収量とタンパクにおよぼす影響(H11)

注) 穂肥施用は出穂前17+7日。「早2+2」は出穂前22+13日。タンパク含量は玄米水分15%換算値。

